



能古島の環境変化(一)

九州大学生物研究部 有志

□ はじめに

昨年、能古島で昆虫採集を行っている人や一〇〇mの巻尺を持って野山を分け入っている集団をお目につけなかったでしょうか。それはおそらく九州大学生物研究部の者です。私たちは代々、能古島をはじめとする福岡市近郊の動物の調査を自主的に行ってきた。昨年度は、九州大学後援会の助成事業という形によって、これまでの能古島の動植物に関する調査結果をまとめるために、一年間を通して調査を行っていたのです。今回からの能古博物館だよりでは、数回に渡ってこの調査結果に関する記事を掲載し、能古島の動植物とそれを取り巻く自然環境について考えてみたいと思います。

能古島は博多湾に浮かぶ周囲十二kmの島で、早田古墳や鹿垣のような遺跡から伺えるように古くから人々が生活しており、島内には畑地、水田、ため池、竹林、雑木

林などの里山環境が現在も残されている島です。里山の多様な環境にはそれぞれの環境に合った動植物が数多く生息し、複雑な生態系を築いています。また、人々の生活圏を離れると、海岸部からの傾斜地には、思索の森を中心として発達した照葉樹林が西側に広がっています。このように能古島は福岡都市部近郊にありながらも、里山と照葉樹林という自然環境が比較的良好的状態で現存し、数多くの野生生物が生息する生物多様性に富んだ島であります。これらの野生生物やそれを取り巻く自然環境は、能古島の文化や伝統、風土、生活を支え育んできた大変貴重なものです。

しかしながらここ数年は、観光施設が相次いで建設され、島を訪れる人が年々増加しています。さらに二〇〇四年には、貴重な動植物が多く確認されていた「ため池」周辺の森林が大規模に伐採され、急速に自然環境が失われつつあり

夏には何種類もの貴重な水草で覆われる早田上池 (2006.11.12 撮影)

ます。

私たちは、過去に九州大学生物研究部の一員として、能古島の豊かな自然環境に生育する多様な動植物を記録し継続的に生物相調査を行ってきました。そのため、近年能古島が置かれている現状に大変危機感を募らせています。長い歴史の中で生み出されてきた豊かな自然環境とそこに生息する野生生物は市民の共通の財産として、後世に引き継いでいかねばなりません。

そこで私たちは、現状把握のための基礎的資料となる年間を通した詳細な生物相調査を行い、それらの結果を過去の文献から得られる生物相の情報と比較し、近年の急激な環境変化に対する生物種の動態あるいは能古島の直面している生物多様性消失の危機の実際を明らかにすることによって、能古島の自然環

境を保全するにあたってどのような対策が必要であるのかを提言していくことを目的として調査を行いました。



能古島全体ではモウソウチク林の管理が放棄され、照葉樹林を年々飲み込んで拡大している。こうした竹林の林床は枯れた竹が折り重なって暗く、耐陰性を持った限られた植物しか生育できない。(2006.8.23 撮影)



南東部の休耕田にて昆虫相の調査風景。稲作はされていないが草が維持されている。(2006.4.17 撮影)

具体的には、調査は植物相、トンボ相、陸生カメムシ相、水生昆虫相、ゾウムシ相、アリ相、両生類爬虫類相、鳥類相の八分類群に渡り、一年間を通して行われました。そして、現地調査により得られたデータと過去の資料との比較を通して現状を把握することで、どのような環境にどのような生物が存在するのか、またどのような環境が危機に晒されているのかということも明らかにしました。また、今回の調査では、再調査可能な方法で調査を行っていたため、数年後に同じ方法で調査することにより、今後の環境変化に対する生物の動態が分かることが期待されています。



ゴウソ *Carex maximowiczii*

湿地に生えるスゲ。能古島では年間を通して水の溜まる休耕田の畦に生育している。(2006.4.17 撮影)



フテリンドウ *Gentiana zollingeri*

雑木林や照葉樹林の林床に生える多年草。点々と散生し、春先の林床を青紫色に彩る。(2006.4.17 撮影)

文責・写真／九州大学生物研究部
田金秀一郎

※次回は「能古島の植物と自然環境」です。

南冥と鎮西の漢詩人(四)

南冥と田能村竹田

神戸女子大学名誉教授

林田愼之助

田能村竹田が亀井南冥を博多郊外の百道林の寓居に訪ねたのは、文化二年（二八〇五）の一月のことで、ときに竹田は二十九歳、南冥は六十三歳であった。そのときの二人の邂逅の模様を伝える資料は南冥の側にはのこつておらず、『竹田莊師友画録』上下二巻のなかに、『亀井魯』の一条をとどめているだけである。

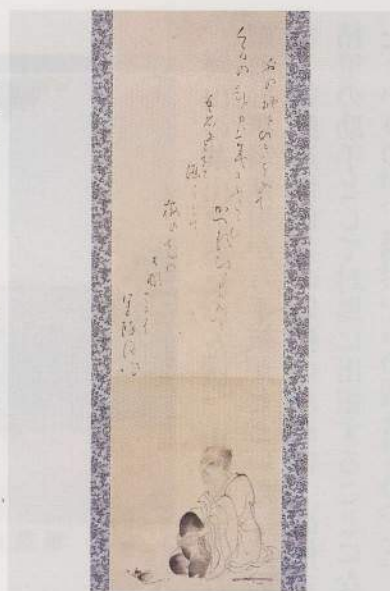
南冥先生、名は魯、字は道濟（載）。南冥と号す。学問文章は一世に鳴る。世はともにも海西一代の儒宗となす。晩（年）に墨竹を写す。予は二紙を觀るに、劍拔き怒張り、英氣は紙表に溢れ出づ。題字も亦た豪語多し。其の一に曰く、題二十一と。其の二に曰く、第四十六と。何の謂なるかを知らず。予は昔福岡の府を過ぎ、先生に候調す。先生存さず。方に帰らんとするに途に野川有り。時は正に春仲、水流結々（流れの速き貌）たり、芳草茸々（繁茂の貌）たり。野鴨三四、其の間に拍々（羽音の貌）たり。川に小橋を架す。橋畔に一老翁を見る。杖に依り景

を撫して立つ。短髪種々、顔色微し赤し。鬚髭多く生じ鬚髻（髪はうさうの乱れたる貌）雪白なり。茶の褐衣を服し、眼光炯々として人を照らす。一たび望めば、其の常流にあらざるを知る。意に謂えらく、是れ先生ならんと。之に問えば、果して然り。爾後既に数紀を経るも、風貌仍お眼中に宛然たり。

竹田は南冥の墨竹画をみて画家としても一家をなすとみていたのである。晩年に描きはじめられたせいか、その墨竹画に接する機会は少ないが、南冥の書になると、一目彼の書だと瞭然たるものがあるほどに、これまた「英氣は紙表に溢れ出づ」るばかりか、亀門独自の個性的な書風を確立して他の追隨をゆるさぬところがある。

竹田にはまた、『屠赤瑣録』全六巻があり、国書刊行会本の全集では、巻頭にこれを収めるが、この書物は、竹田が四方に漫遊し、名士を訪問したさいに見聞した逸事奇蹟のたぐいを記録したもので、さすがに諸処方々を歩いた風流人だけに該博な見聞のうえに、きんきいた選択の眼がはたらいていて、どれを読んでも結構面白い読み物となっている。そのなかに亀井南冥にふれた記事が数か条あり、南冥を福岡藩教授に推挙したさいの同藩家老久野外記の大力肥満ぶりをユーモラスにとらえた逸話など興味ぶかい若干の資料がふくま

れていて、竹田の南冥に寄せる関心にはなみなみならぬものがあつたことを物語っている。



「田能村竹田肖像」大分市美術館蔵

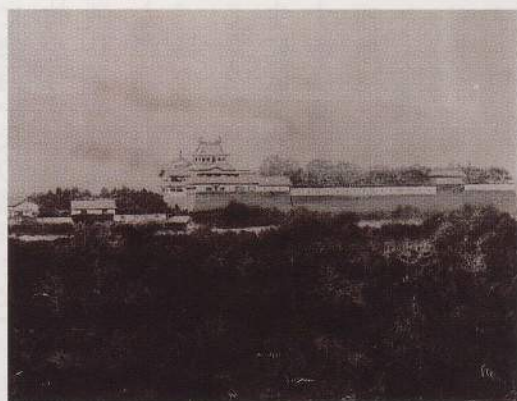
田能村竹田は名を孝憲、字は君彝といい、豊後竹田、岡藩の医師の家に生まれた。中川侯七万石の城下町竹田は、奇巖怪石のそびえたつ谷あい盆地にあり、この町に入るためには、どの路をとるにしろ山をくりぬいた隧道をくぐらねばならぬ仕組みとなっていて、竹田の町自体が一つの天然の要害をなしていた。

そのせまい盆地の中央部に切り立つような山崖があり、その上に岡城がある。晴れた日にこの城趾にたつと、遠くは祖母、近くは九重の連山を望むことができる。田能村竹田がまたの号を九重仙史と称したのは、九州山系のなかでもきわだって美しい九重の山容をこよなく愛したからであろう。いまもお岡城は、豊後日出にとれた滝廉太郎が「荒城の月」の曲想をねった場所柄にふさわしく、中世のふるさびた山城の風韻をとどめている。

いたるところ奇巖怪石をのぞむことのできる竹田の城下町に足をふみいれた者は、ここに育った田能村竹田が近世屈指の南画家になるのはしごく当然のなりゆきと思うにちがいないが、彼が南画家としてばかりでなく、風流を愛して自由な境遇を生きる在野の文人として自らの生き方を決定するようになるまでは、かなり曲折のある人生の行路が彼を待ちうけていた。

医師の家に生まれながら医師には不向きであった竹田は、藩命で『豊後国志』の編纂にたずさわるが、この職務に忠実であったものの、修史の仕事は本来彼の志ではなかった。いずれは、藩の羈絆を脱して風流三昧の自由に生きようと考えていた。

南冥をおとずれた文化二年に、田能村竹田



「豊後岡城全景」の古写真 竹田市教育委員会蔵

が痼疾の眼病の療養をかねて、京都の皆川淇園のもとで儒学の修業をするために遊学の願いをだしていたのが藩の許可するところとなり、まず福岡を経て長崎に出遊し、その四月に京に向かうことになる。このときすでに竹田は自由人として生きる足がために入ったとみてよい。

これが竹田が南冥に会った最初であり、最後であったが、このとき受けとめた南冥の「眼光炯々として人を照らす」常流にあらざる風貌は、竹田の眼底にあつて消えることはなかった。それ以来この悲運の儒者への関心は竹田のなかで持続した。

その後、六年を経て、文化八年に竹田は再び上京。今度は村瀬榊亭の塾に遊学し、寄宿先の大阪生田の持明院で、初めて頼山陽と出会い、半生知己の交わりを結ぶ。当時、山陽



「岡藩城下町写真」写真提供 竹田市教育委員会

は京都で私塾を開いていたが、青年の日の放蕩無頼の行跡が、口さがない京の儒者たちの噂の種となり、いつこうにうだつのあがらぬ暮しを続けていた。山陽は脱藩無頼のかどで、三年間の自宅軟禁から解放されたのが、文化七年の正月。それから丸一年、父、春水の知友菅茶山のもとにあずけられ、その黄葉夕陽郵舎の代講をつとめたのちの出京だった。

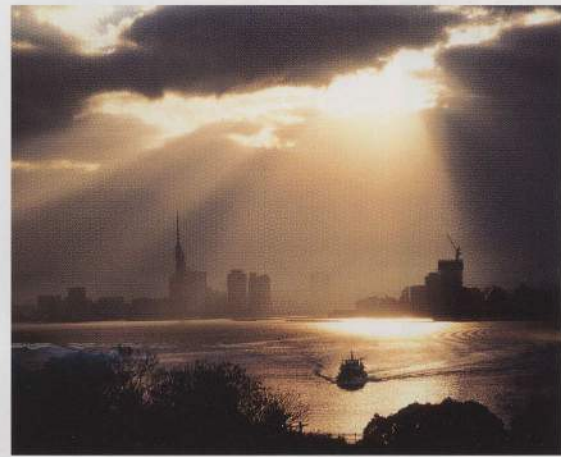


菅茶山の廉塾(黄葉夕陽郵舎)

岡山の茶山の塾にいた頃、山陽のもとに、肥前の草場佩川から手紙がとどいた。このたび、朝鮮通信使との応接のために、副使古賀精里の助手として対馬に出張することになったというのが、佩川からの報せであった。

第9回 能古の風フォトコンクール 入賞者発表

グランプリ賞



「朝の海」 中山 隆史氏

準グランプリ賞



「秋晴れの日」 高鷹 るみ子氏

特別賞



「能古の子」 小山田 公子氏

能古島賞



「after breakfast」
藤吉 マツエ氏

第9回能古の風フォトコンクールも皆様のおかげで無事終了致しました。有難うございます。応募者全員の作品を11月30日迄展示致しております。どうぞ御来館下さい。

第10回能古の風フォトコンクールは審査方法が再度変わります。幅広く、より多くの島の人々に参加していただきます。ご期待ください。尚、応募要項は変わりません。ふるって御応募下さい。

第9回 能古の風フォトコンクール 入賞者

各賞	賞金	題名	題名	住所
グランプリ賞	五万円	朝の海	中山 隆史様	福岡市南区井尻
準グランプリ賞	三万円	秋晴れの日	高鷹 るみ子様	福岡市早良区原
特別賞	二万円	能古の子	小山田 公子様	福岡市西区生の松原
能古島賞	一万円	after breakfast	藤吉 マツエ様	福岡市中央区小笹
入選	一万円	“メール”に夢中	木下 良男様	筑紫郡那珂川町
入選	一万円	能古のおくんち	瀬野 雄市様	福岡市博多区東光寺町
入選	一万円	日だまりのロープ	藤吉 栄一郎様	福岡市中央区小笹
入選	一万円	レトロな光景	松本 洋子様	福岡市早良区原
入選	一万円	風の源を求めた	羊 迷 様	筑紫郡那珂川町
入選	一万円	ここにたどり着いた	八尋 祥文様	福岡市西区姪の浜

能古博物館協賛会・友の会

(敬称略・順不同)

〔法人協賛会員〕

- 浄土真宗本願寺派 浄満寺
(医)原土井病院
ワタキョーセイモア(株)
福岡メディカル
リース
(株)アールアンドエム
(株)CDS
福岡桜坂郵便局
鬼敷信孝
福岡赤坂郵便局
戸田正義
日清医療食品(株)
福岡支店
福岡経営
管理センター
(株)サンコー
(医)恵光会 原病院
(株)西日本シティ銀行
和臼支店
(株)西日本シティ銀行
千代町支店
(株)西日本シティ銀行
香椎支店
(株)西日本シティ銀行
土井支店
(株)西日本シティ銀行
福岡通センター支店
(株)西日本シティ銀行
新宮支店
箱崎支店
(株)西日本シティ銀行
久山支店
(株)サンネット
(株)福砂屋
(医)笠松会有吉病院
(有)ウエダ建築社
九州防災工業(株)
(有)西部エレベーターサービス
(有)豊友設備
総合産業(有)
(株)ニッコク・トラスト
(株)メイデン
ダイヤド(株)
(株)ホスピカ
ギヤラリー倉
(医)大乗会福岡原リハビリテーション病院
(医)江頭会さくら病院
(株)二子口九州支社
宗教法人善隣教
(株)リコー商会
(株)橋本組
下山工業(株)
学校法人原学園
(協)唐人町ブラザ甘菜館
大和産業(株)福岡支店
社会福祉法人
福岡ひまわりの里
大成印刷(株)
(株)ホームケアサービス
能古映画サークル
(株)岩室商会
特別養護老人ホーム
なごみの里
エームサービス(株)
(株)センタービジネス
(有)トータル・サポート
コーポレーション
(社)福多々良福祉会

〔協賛会会員〕

- 松本盛二 ③
南誠次郎 ⑮
中山重夫 ⑪
菅直登 ⑧
早船正夫 ⑮
笠井徳三 ⑦
安陪光正 ⑤
亀井准輔 ⑮
石橋観一 ⑫
木原敬吉 ⑧
坂田幸代 ⑩
原田國雄 ⑦
森光英子 ⑧
永井功 ⑦
緒方益男 ⑦
山本稔 ③
武内隆恭 ②
白水義晴 ⑧
石野智恵子 ⑮
翠川文子 ⑫
多々羅節子 ⑮
熊谷豪三 ⑥
有江勉 ①
山崎拓 ①
七熊太郎 ⑦
片桐寛子 ⑦
西村俊隆 ⑥
明石散人 ⑦
矢部俊幸 ③
上原孝正 ③
早船真一 ③
西方俊司 ⑤
亀井千秋 ③
土生偕子 ①
藤井鉄夫 ②
添島律子 ①
瀬戸美都子 ①
永野豊 ①

〔友の会会員〕

- 伊藤茂 ⑪
水田和夫 ⑥
木戸龍一 ⑩
岡部六弥太 ⑮
星野万里子 ⑧
吉村雪江 ⑧
安松勇一 ⑪
上田良一 ⑦
高田浩二 ⑨
桑野次男 ⑧
藤木充子 ⑫
和田宏子 ⑬
行成静子 ⑮
片岡洋一 ⑫
石川文之 ⑧
都筑久馬 ⑦
横山智一 ⑧
古賀清子 ⑩
宮崎集 ⑦
西政憲 ⑦
岡本金蔵 ⑦
三宅碧子 ⑮
星野金子 ⑦
林十九楼 ⑭
宮徹男 ⑮
織田喜代治 ⑥
上田博 ⑮
鶴田又三子 ⑦
塚本美和子 ⑥
伊藤康彦 ⑤
寺岡秀実 ④
原田種美 ⑤
石橋清助 ⑭
井上敏枝 ⑤
隈丸清次 ⑦
吉富とき代 ⑤
大山宇一 ⑥
葉山政志 ⑮
川島貞雄 ⑫
岸洋子 ⑭
久芳正隆 ⑨
半田耕典 ⑥
莊山雅敏 ⑥
吉田洋一 ⑤
永岡喜代太 ⑫

- 神戸純子 ④
渡辺美津子 ⑤
山田博子 ⑫
佐藤泰弘 ⑥
前田静子 ④
飯田晃 ⑤
神戸聡 ③
田里朝男 ⑧
吉田一郎 ①
池田修三 ⑪
岩谷正子 ③
小川正幸 ②
榎藤菊朗 ②
増田義哉 ④
宮嶋熊太郎 ⑨
土井千草 ①
松坂洋昌 ④
福永実 ①
鹿毛博通 ④
古川映子 ⑪
松井俊規 ⑨
衛藤博史 ⑧
伊藤泰輔 ⑧
西村蓬頭 ⑧
執行敏彦 ④
渡邊千代子 ②
後藤和子 ⑦
脇山浦一郎 ⑪
川浪由紀子 ⑪
川田啓治 ③
足達輔治 ⑤
中村ひろえ ⑨
古賀謹二 ⑦
野尻敬子 ③
大野幸治 ⑨
柳田正巳 ⑨
青木良之助 ⑦
金子柳五郎 ⑨
金野至 ⑩
井手親栄 ⑩
宮崎春夫 ⑩
鬼丸碧山 ⑦
山崎エツ子 ④
小山元治 ⑧
吉瀬宗雄 ⑮

- 古賀義朗 ⑬
西山正昭 ⑨
市丸喜一郎 ⑫
豊島嘉穂 ②
守瀬孝二 ①
鋤田祥子 ⑥
甲本達也 ⑥
田本政宏 ⑩
濱北哲郎 ⑩
大塚博久 ⑦
辻本雅史 ⑤
松田清 ⑧
杉浦五郎 ⑦
中野晶子 ⑩
大谷英彦 ⑮
野崎逸郎 ⑮
住本露 ⑥
前田敏也子 ⑮
村山吉廣 ⑬
住本直之 ⑥
間所ひさ子 ⑮
伊藤光邦 ①
鹿毛英子 ①
古賀朝生 ①
林正孝 ③
井上雷策 ②
田中寛治 ②
土屋伊碓雄 ①
白井京子 ⑦
原礼子 ①
原康二 ①
原牧子 ①
杉みどり ⑧
杉一祐 ①
山下清久 ②
杉原正毅 ⑨
杉久保昇 ②
党隆昌 ②
福澤昌弘 ②
小嶋幸雄 ⑧
福本孝行 ⑦
樋口陽一 ②
片桐淳二 ⑦
木下勤 ⑨
酒井カツヨ ⑧

- 島義博 ⑥
田上紀子 ⑧
中畑孝信 ⑧
西島道子 ⑮
西嶋洋子 ⑧
村上靖朝 ⑧
村上魁 ⑧
木原光男 ⑥
鈴木惠津子 ⑥
富永紗智子 ①
吉村陽子 ⑦
松本雄一郎 ⑦
石橋善弘 ⑧
徳重謙治 ①
岸本雄二 ③
武田正勝 ②
武田初代子 ②
近藤文文 ⑧
西嶋克司 ⑨
榎島政信 ③
上杉和稔 ①
野上英寿 ⑥
富田哲子 ①
益尾天嶽 ①
小山正文 ①
石橋正治 ①
亀石正之 ②
藤田一枝 ②
藤尾清美 ③
蓮尾正博 ③
森祐行 ⑦
吉安蓉子 ⑥
村上牧 ⑦
小谷修一 ⑦
阿部昌弘 ⑤
結城進進 ②
重松順洋 ②
永石史郎 ②
藤吉マツ子 ⑤
亀井勝夫 ②
岸川龍一 ①
山本光玄 ④
吉開史朗 ③
香立スミエ ①
藤瀬三枝子 ⑥

- 野見山実 ④
頃末隆英 ②
友原静生 ②
森口智子 ⑥
山本信行 ①
鏗玄和診療 ⑥
井上陽一 ⑤
寿美電気 ⑤
矢野鈴子 ⑤
藤崎和子 ⑤
宮崎直正 ⑦
原田雄平 ⑤
山本勲 ③
高根襄 ③
高根幸子 ③
柴田優美 ②
谷口澄江 ②
横田武子 ①
石橋順子 ④
西原正俊 ②
小松友彦 ③
木血敦誠 ③
矢野義憲 ①
丸山敏子 ②
江崎小二郎 ②
佐藤洋子 ①
稲永カヲル ②
的野彰 ①
高田久美子 ①
森山純子 ①
小山保彦 ①
小山勝子 ①
側嶋眞智子 ①
筑紫咲子 ①
其原俊一 ①
小山富夫 ①
江原幸雄 ②
中山隆史 ①
小川道博 ①
瀨野雄市 ②
有吉キヌ子 ①
箕原幸久 ①
森田英子 ①

●能古博物館ご案内●
開館 9:30~17:00 (入館16:30まで)
休館日 12月1日~2月末日の冬季のみ休館
入館料 大人400円・高校生以下無料
交通 姪浜 能古行渡船場→フェリー(10分)
→能古(徒歩10分)→博物館
〒819-0012 福岡市西区能古522-2
☎(092)883-2887
FAX(092)883-2881
HP http://www.nokonoshima-museum.or.jp
E-mail info@nokonoshima-museum.or.jp

能古博物館の会
※新規の御加入(先号以後、平成18年10月15日現在)を、記載いたしておりますので、何卒ご芳名をご確認ください。
自然と文化の小天地創造
協賛会(個人)年間1万円(何口でも可)
友の会年間3万円(何口でも可)
(館)の活動、館誌購読と催事企画に参加
〔館維持、資料収集、施設整備等の資金援助を受ける〕
納入方法 郵便振替 01730960970
財団法人 能古博物館
右の会費受領は、その都度本誌に掲載、以後会費相当期間を名簿にします。